

学生という同じ土壌で環境の課題に取り組むということが、将来に向けて大きな意味を持つと考えます。それぞれの分野に散らばって行く前に、その根っこの部分で共通の理想や理念などを共有することは、極めて重要なことです。

「環境人リレーインタビュー21」②  
特別インタビュー

滋賀県立大学環境科学部助教授 井手 慎司 さん



# 大切なのは環境の未来に向けて 共に立つ根幹を培うこと

「今回の『世界湖沼会議』においてはじめて「学生セッション」が開催されたわけですが、この新しい試みに期待しておられることをお聞かせください。また、「学生だからできること」をどのようにお考えですか。

**井手** 日本でも行政、市民、研究者、企業と共にNGOの役割が重視されるようになってきました。その視点から言うと大学生たちにも担うべきポジションがあると考えます。大学生レベル以上になれば、社会の構成員として果たすべき役割があるのではないかとことです。また、彼らの中から行政の分野に進んだり、研究者になったり、NGO活動に本格的に取り組む人が出てくるわけですが、その前に同じ土壌で環境保全の課題に取り組むということが、将来に向けて大きな意味を持つと考えます。それぞれの分野

に散らばって行く前に、その根っこの部分で共通の理想や理念などを共有することは、極めて重要なことです。大学生でも、学部学科によってものごとの捉え方や考え方に違いが出てきます。卒業時にはかなりの差が生じるわけです。だからこそ、思考パターンが定まる前に、環境課題に関して繰り返し討議し、共通する「分母」を培ってほしいのです。「学生だからできること」に関しては、今回の企画が決定した時点で、学生たちにも事前に考えるように指示しました。何度も討議していただくようです。私はいくつもの考えがあると思います。結論を急いだり、無理に限定する必要はありません。大切なのは、次代に向けてさまざまな可能性を秘めている学生たちが「学生という存在」として集うことです。今後、「学生だから何ができるのか」を問い続けて

いくことが重要です。欧米などでは学生もNGO活動を活発に行っているケースも多いように思いますが、これからのNGOは日本も含めてどのように変化していくと予測しておられますか。

**井手** 現在、海外では二つの方向に分化しつつあります。一つは原理原則を固守するグループです。いけないことは、絶対にいけないという考え方です。もう一つは究極の目的を達成するためには、柔軟に手段を選ぶグループです。その方法を探ることで成果があらると考えれば、行政や企業とも積極的に連携します。最近には特に後者が目立ちますね。ひと昔前までは、NGOと企業とはかなりの対立関係にありました。しかし、もう企業サイドも環境問題を無視するわけにはいき

ません。その点では、時代は変わりました。経営上の理由も含めて環境配慮を積極的に打ち出す企業が続々と出てきています。このような企業と連携するNGOが増えてきたわけです。ここで、新たな問題が生じています。企業との連携を模索するNGOと原理原則主義のNGOとの反目です。互いに非難し合うという構図がドイツのNGOなどで顕著化はじめています。このような傾向は、今後、全世界に拡がって行くのではと考えます。日本の場合は、まだNGOの歴史自体が浅く、役割や目標などは曖昧だと感じます。当分、混沌とした状態が続くのではないのでしょうか。また、欧米系のNGOは運動体として連続性があります。歴史のあるNGOは十九世紀の終わりに設立されており、当初は野鳥保護や自然保護を母体にスタートしています。これが、やがて反公害や反核または原子力発電反対になり、今日の地球環境問題をテーマにするようになったのです。これに比して日本は、公害に対する反公害系団体と尾瀬の保護を出発点とする自然保護系、地球環境問題系の各団体に分かれており、それぞれバラバラに活動しています。しかし、いずれは三つの流れを統合し、巨大化・全国化を図る流れが出てくると思います。もちろん、これとは別に自治会に近いような地元密着型の草の根運動的な活動を続けるグループも、それなりの存在意義を持って地域に根づいていくはずですよ。